

桐 蓄

編集発行 第2号
 群馬県立桐生工業高等学校
 同窓会事務局 編集部
 群馬県桐生市西久方町1-1-41
 TEL 0277 (22) 7141
 印刷 湯浅印刷



桐蓄会館全景 (50周年記念事業)



第五代同窓会長
 佐藤 富三

発刊のごとば

昭和四十年十一月に創刊号を発行してから沙汰やみになつていた「桐工同窓会報」が、同窓会諸兄や校内関係者の強い要望に応えて、この度、第二号を刊行する運びとなりましたことは、大変喜ばしい限りであります。

本校同窓会は、ご案内のように今や、一万五千人を擁する一大集団となり、会員は全国各地において、産業界、地域社会のために大いに気を吐いております。桐生市内においても各界、各層における、それぞれのご活躍は、一般市民の目を見張るほどのもので、われわれ同窓会の名を、いやが上にも高揚しているところがあります。

本校が創立五十周年記念式典を催して久しくなりますが、その頃から同窓会の支部設立の声が、俄に高まつて参りました。早速その期待に沿うよう慎重な準備を進めてきましたが、昨年五月、第十支部を皮切りに設立の火ぶたが切られました。約一カ年余を経過した現在（平成二年九月末）十四の支部（行政区では十五の区）の結成をみるに至りま

した。これひとえに各支部の発起人、新役員各位の大変なご労苦によるものと、深く感謝をするところであります。

支部の必要性は設立総会の折に、それぞれ説明しましたので省略しますが、今後の支部の運営には何としても本部とのコミュニケーションが欠かせません。本部と支部との緊密な連携こそ、支部活動の活性化に役立つものと信じます。その一助として、この「会報」が活用されるならば、再刊した理由の一つを満たすことになりま

す。とかく、号を重ねて会報を続けることは容易なことではありません。継続することによつて、ますます会報の重要性は増えます。どうぞ同窓会の続く限り、連綿と続くことを期待してやみません。

なお、この号を刊行するにあたり、編集委員をはじめ同窓会事務局の諸先生方に、献身的なご協力をいただいたことを申し添え、お祝ならびにご挨拶といたします。

同窓会誌の再刊に寄せて

校長 樽井 哲



同窓の方々にはますます御健勝のこととお慶び申しあげます。

電気科各一学級の二学級、全定合わせると、一学年十学級の大きな学校であります。また、同窓の方々の御活躍により、地域の信頼も高い学校となつております。

さて、桐工の現在の状況について述べてみますと、その一つは、設備の近代化であります。

このたび、久しく休刊していた同窓会報が、装いを新たに再刊されることになりました。これは、学校にとりましても、学校のことをお知らせできるということもあり、喜びにたえないところである。御存知のとおり、本校は、昭和九年に創立以来、同窓会員の御支援のもとに発展し、六十年になるうとする歴史と伝統を備えた名門であります。現在は、一学年で、全日制では、機械科・電気科各二学級、建築科・土木科・色染化学科・繊維工学科各一学級の八学級、定時制では、機械科

生徒の急減対策があります。今後十年間のうちにまほどの生徒減が生ずる状況にあり、

各学校とも対応が迫られております。本校としては急減期を単に学校縮小期としてではなく学校活性化充実期としてゆきたいと考え、地元産業の実態をふまえながら学科の統合による新学科の設置をすすめているところであります。同窓の方々の御理解と御支援を御願ひする次第であります。終わりに、同窓の方々の今後一層の御活躍を祈念して再刊に寄せる言葉といたします。



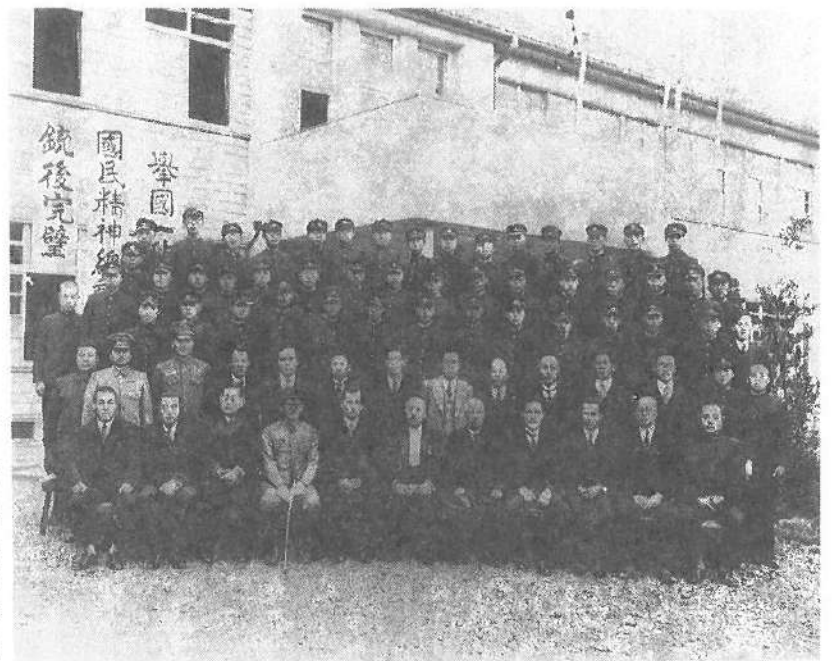
同窓会報第二号発刊に寄せる

初代同窓会長 朽津房次郎

昭和四十年に同窓会報創刊号が刊行されて以来二十五年ぶりに第二号が刊行されることになり誠に感無量です。これも偏に会長以下役員熱意と事務局の充実振りが努力の賜物と深甚の敬意を表します。

第二号は五十周年記念事業と支部設立を主なるテーマとした特集と聞いておりますので記念事業に携った者としていささか所感を述べてみたいと思います。

私も今回の記念事業には先づ資金の確保が先決であると考へ横塚募金部会長、佐々木



第一回卒業生 (昭和十四年三月)

井P会長、佐々木校長の三氏から五十周年記念事業の実行委員長をやれと云われた時は果して懸案の事業計画が遂行できるか否か危懼して居ったのであります。各委員のこの努力により予定した事業計画全部が滞りなく完成し更に今後の運営基金まで確保できてほつとして居る処です。

校長(場合により秋山教頭又は進路指導の先生)と共に同窓会、P 関係以外の一般募金を対象に県内百有余の企業を訪問(一企業平均三回)し、趣旨説明、募金希望額等をお願いし大方のご賛同を得、更には又桐生市をはじめ関係地方自治体にも相応のご助成をお願いし略々所期の目的を達成できたわけです。これも本校によせる各企業自治体の期待が如何に大きいかを物語るものであります。後輩諸君も肝に銘じて戴きたい処です。

記念館の建設にしてもセミナーハウスが県、国費で建設できたことは誠に幸甚でありましてその分桐雷会館に全力を傾注することができたわけです。建設会社の選定までには多少の曲折があつたものの、良心的な落札価格により発注することができ他校に優るとも劣らぬ立派な会館を建設することができた次第です。その他の事業にしても予定通り実行できたものと確信します。

更に記念事業の大きな収穫は、これを契機に同窓会が益々強固になり、会長はじめ我

々の多年の念願であつた支部結成が急速に進んだ事であります。同窓会報第二号が発刊されれば同窓会の活性化はもとより母校に対する関心も高まり会則にある目的達成にも大いに寄与するものと確信して居ります。

同窓会報第二号発刊に当り先づはご慶祝申し上げますと共に第三号第四号…と継続性をもつよう各役員事務局に一段のご尽力をお願いして第二号発刊に寄せる所感といたします。

総会・支部結成

平成二年度総会(於・産文)



第三支部誕生とこれからの歩み

第三支部長

周東正治

の幹事会を経て、昨年三月第三支部設立総会を開催いたしました。

設立に向けて先ず手始めの作業は、町内ごとの幹事が各家庭を訪問し、本人居住の有無をお伺いする調査からでした。幹事会を重ねることに互いに緊密さを増し、支部設立のために熱意を注いでくれました。

お陰様で本年度の支部総会も十五名の幹事諸兄のご協力のもと、案内状の作製や発送、会費の集金、懇親会の準備と進められ恙がなく開催されたことは真に嬉しくご同慶の至りと存じます。

この第三支部には行政・文教の施設も多く、またドーナツ化の進む地域です。で会員数も二百二十余名と、他支部に比べ多い方ではないようです。

このたび支部を結成して考えられることは、

○年令に親子ほどの巾がある会員を網羅しており、会員の意識が一つにまとまれば大変素晴らしいことですが、一方多数ゆえ連帯感の薄らぐ要素も持

つていこと。

○近所や同じ町内会などに会員が身近かに居住しているの、同窓のよしみを地域のいろいろな活動に発揮すれば、その面から地域発展に寄与できることと思ひました。

今後の課題は目的に添った事業を企画し実施することですが、仲々よい案が浮かびませんが、とりあえず会員同志の親睦をはかりながら、支部組織の必要性を伝え理解して頂くことでしょう。支部運営の会費も年額五百円と定めましたが一様にお預りすることが難しく、集金についても納入方法を考えなくてはなりません。

組織を作れば、また様々な問題も出てくることですが、桐生工高の長い伝統と共に歩む同窓会の一員として、第三支部をみんなの力で育てて行くために、他支部の動向や活動状況を知り、私達の活動に加えて行くことが必要です。今後同窓会本部の支えを頂きながら、実りある第三支部の発展に努めて行くつもりです。

第十支部

支部長

峯崎 一男

この度、第十支部設立にあたっては、同窓会長はじめ担当職員、役員の方々には何かと御指導、御支援をいただき、又、支部役員になられた方々や、会員各位の御協力と御理解によつて、既設支部以外では、一番に支部設立が出来ました。関係各位に衷心より厚く御礼申し上げます。

当支部地区内には母校があり、同窓会長も地区内であつた好条件で、支部設立は比較的スムーズでした。しかし同じ同窓生でも親子ほど、或いはそれ以上の年齢差があり、考え方の相違、時代のズレを痛感させられました。

同窓会（支部）活動の重要課題を、会員相互の親睦と融和を深めること、とするならば、ある程度狭い地区の支部活動は、今後ますますその必要性を増すものと思います。

関係各位に、より一層の御指導、御鞭撻、御支援を御願ひ申し上げる次第です。



第十一支部

支部長

下山 蔵司

昭和四十年は同窓会報の創刊号が発刊され、支部結成第一号として境野支部が結成されました。東京オリンピックの開催された次の年で、GNP世界第二位の経済大国に邁進する時で、新幹線ひかり号が東京―大阪間を三時間で走る新スピード時代の幕明けの年でした。当時の同窓会長は朽津さんで、同窓会の事業として桐生市を中心に県内外の支部作りが計画され、そのモデル地区として境野地区に白羽の矢が立ち、同窓会組織部と

地元有志が相談をし会員名簿の作成支部規約の立案役員の選任等を行い、四十年九月六日に設立総会を開き境野支部が誕生致しました。

当時は会員も百三十名でまとまりが良く、役員も積極的に協力してくれました。年間行事として新年会を初め、五月には総会と新入会員の歓迎会、秋にはソフトボール大会を行い親睦を深めてまいりました。翌四十一年には広沢支部（斉藤武三郎氏）が設立され、広沢・境野支部と職員チームの対抗野球戦を行い交流を深めた想い出がなつかしくしのべれます。四十三年には菱支部（亀山憲明氏）が誕生しましたが、その後各地区の支部作りが進展をみず三支部のみで終つてしまいました。あれから二十五年の歳月が流れ、現佐藤会長により市内を中心とする支部作りが始まりましたが、境野支部も休止の状態になりましたので、発起人三十名が相談をし再発足致すことになりました。

境野地区にも六百名の会員が居りますので之を十一区域に分け六十七名の役員が選出

され、平成二年十月十二日に境野町松本会館に於て総会の運びとなりました。会場には日の丸と校旗が掲げられ、八十二名の会員の参加があり学



第十三支部

支部長

斎藤 武三郎

昨年来同窓会支部の結成を佐藤会長を中心に精力的に進め市内各地区同窓生諸兄のご協力で、見事に十数支部設立の成果を見たことはご同慶に耐えませぬ。これ偏えに会長の卓越した愛校心による指導力と担当諸先生方の熱意の賜物と深く敬意を表します。

今後これを基盤に広く地区を拡大して画期的な発展が望まれることは明白です。

この時に当り会報発行の運びになったことの意義は、洵に大きいと思います。桐工に学び今遠隔地に在る同窓生諸兄には故郷桐生の消息や母校桐工の近況も伝わるでしょうし、私達郷者には全国的に散つて活躍中の同窓生諸兄の様子を伺い知る。考えただけでも楽しい機能を發揮するに違いありません。

全国的組織網成るのを見出して会報第何号が私たちの手許に届く時、我が桐工同窓会はどうなっているでしょうか、愈々の発展を希つてやみませぬ。

第十七支部

支部長

亀山憲明

広辞苑で同窓を引用すると「同じ学校または同じ師に学ぶこと」と書かれている。昭和四十三年に桐工高同窓会支部が誕生して以来、二十有余年を経過し、その間支部活動の休止もあつて、組織の弱体化を期した。そこで平成二年支部会員の見直しと、組織の充実強化を図るべく会員有志の協力によつて再発足したわけである。会員数も発足当時から比べると二倍の四百名以上の会員数となり、この増加の推移をみると、母校の建学精神を信奉した社会の原理であろう。平成二年度の事業としては、まづ会員相互の信頼関係の構築であり、会員の和を尊重し、地域に根づいた小さな和を、大きい和に広げ、地域社会や発展の原動力と限らない社会に貢献する会員としての自覚をもち会員のコンセンサスを図る様努力する所存である。二十一世紀を標榜する「ハイテクとファッションのまち」桐生市の理想郷づくりに同窓会員の一層の団結と母校への愛着心を、駆りたてて行きたいと思う。

卒業五十年

第一回卒業生 星野常男

昭和十四年三月九日、太平洋戦争に突入しようとしていた日中戦争の真只中に、日本の将来を夢見てわれわれ四十六名の卒業式は行なわれた。卒業後直ちに海軍艦政本部や航空技術廠など軍関係の就職者も多く、早いは翌十五年の徴兵検査にて入隊し、太平洋戦争が始まるや直ちにビルマ作戦、ニューギニア作戦、フィリピン作戦など南方の諸島や大陸に動員されていったのである。大半の者がそれらの地で戦死や戦病死、餓死など悲惨な目に会いこの世を去つていつたのである。約三分の一は戦争中に、数名の者

クラス会だより

出席者

- 朽津房次郎
- 富岡 繁夫
- 今井 嘉吉
- 小川 宏
- 田村 寿男
- 星野 常男
- 竹内 研一
- 朝倉 康次
- 向田 政雄
- 島田 栄
- 西場 慶助
- 村石 進



第一回卒業生クラス会
サンレーク草木

同窓会の思い出

昭和二十八年紡織科卒業生

井上和三

昭和二十五年校の花が桐工の校庭に満開の四月希望にもえて五十五名が入学し三年後の昭和二十八年の三月に卒業した。

桐工で学んだ後三十七年を経過しましたが高校時代の思い出や同級同志の親睦を計るため三年に一度は同級会を計画し、桐生、伊香保、水上、東京等で実施しております。

ご案内の先生は正田順吉先生、星野常雄先生、関端利雄先生、高瀬良一先生、若月啓生先生が多い様に思います。

この十数年来担任の関端先生は、高齢と病気のため同級会の出席が出来ないのが残念です。

最近では伊香保温泉ホテル「天坊」で平成元年六月十七日に同級会を開催し同級生三十七名の参加を得、有意義に終了することが出来ました。

東京からは小林健二弁護士、神田登君、仙台からは湖山重道君等の参加をいただき一夜

が戦後亡くなり現在生存しているものは二十七名であり、数年置きにクラス会を催してきたのであるが、卒業五十年ということサンレーク草木で十二名の者が集りクラス会を久しぶりにもつたのである。遠い者は関西より、近くても東京、埼玉、千葉などから五十年ぶりに合う級友もあり懇親会の進むにつれて昔話に花が咲いて時の立つのも忘れ深夜まで語り続けたのである。紅葉の見頃と思つて開いた

中、学生時代の思い出や卒業後の話題に花を咲かせ大いに語りあつた。

我々の在学中はスポーツに勉強に大いに頑張つた様に思える。

進学組は木造の紡織科の工場の織機の下で赤尾好夫の英語豆たんを持ち英語の勉強した。

そして十数人の大学入学者が出、それぞれの業界で活躍しております。

又スポーツ面においても昭和二十七年県高校野球大会で優勝し甲子園で島津一、大島のバツテリーで三回戦で涙をのんだがその中の選手で石関健次



二十八年紡織科

卒業生クラス会

東京

園田守、齊藤充、等の選手が甲子園で活躍した。

我々桐生工業高校卒業生は同窓会活動もますます頑張つて充実をさせていきたいと考えておりますが、在校生諸君も勉強にスポーツに大いに頑張つていただきたいと思います。

最後に桐生工業高等学校のますますの活躍と発展を祈念し同窓生のご健勝を念じつつ筆をおきます。

かな山と緑と水に囲まれた歴史ある桐生、四十年離れてい

桐生に美術館誕生

桐生を離れて四十年、桐工卒業後四十七年、と一昨年漸く帰つて来た故里です。ただ家内も桐生出身乍ら病身の為世話をする長女の許を離れられず、万止むなしの单身帰郷ですが、事情はこの故郷に何とか「美の館」を作り故里への口マンを果たしたためです。

それ程有難い故里、詩情豊

た西田博太郎校長の週一回の授業、田口、広瀬、永井、加賀山、等々正にユニークな一流の先生たち、いま考えると余りにも恵まれた学園で、

自由闊達の心を揺り動かした

時桐中を悠に超えた誇りと校風の余韻が今でも残っています。

私は其後桐生工専に進み一時の兵役を経て、三井物産、ダイエー勤務で桐生を離れたが、桐工時代に培かれた自由闊達の生き方をまがりなりにも経読出来たことが、其後の人生を何とか仕遂げ得た土壌と思つてます。

現在桐生に還り財団法人「大川美術館」を創設し、全国的に望外の好評を得つつありますが、これは私の余白の仕事であり、これからです。

私の絵との出会いは、三井物産へ入社直後咯血で約四年間の療養生活を余儀なくされた際に病人の知恵として覚え

た給との付合いが、其後四十年に及び、働き蜂の厳しい会社生活の中で、ボロボロにならぬ為の知恵として身につけた心のマッサージ、即ち空気穴だったのです。日本の名画と言われる作品も相当あるが、

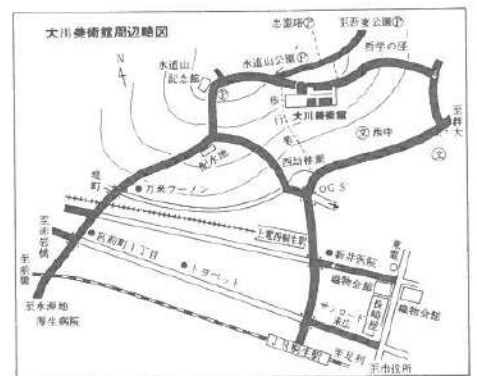
美術品を持ち還つたのと同じでただそれだけです。

美術館を創設するなんて全く考えずに好きで集めたもの

です。若しそう考えたら、出来る筈はないし、万一出来てもこんなよい作品は集まりません。四十年の無欲の継続がそれを生んだのでしよう。

財団法人 大川美術館

大川 栄二



大川美術館周辺地図

■開館時間：10：00～17：30(入館は17:00まで)
金曜日は20：00まで時間延長

■休館日：月曜日(月曜日が祝日の場合開館、翌火曜日休館)、年末年始12月28日～1月3日

■入館料(常設展・企画展を含む)
一般 800円、大高生 500円、中小生 300円
(20人以上団体は20%引)



学校だより

生徒会活動におもむ

顧問 小滝和人

現在の生徒会活動は、四月の新生歓迎会を皮切りに、七月のスポーツ大会、十月の秋の行事（体育祭または工謳祭）、豚汁給食が伝統となつた一月の寒中マラソン、芸能人を招かずに生徒の出し物のみで実施される二月の予餞会と、行事が目白押しである。途中、六月には前期生徒総会、十一月には本部役員改選ならびに、それに伴う後期生徒総会が行われ、二月末には生徒会誌が発行される。

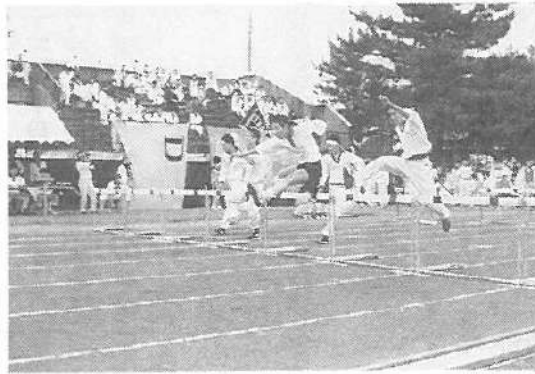
このように、現在の生徒会活動は、生徒の自治活動と言うより、むしろ、行事の企画・運営がその主たる内容となつてはいるのだが、この行事を盛り上げるために試行錯誤を重ねているのである。

行事を盛り上げるのが困難になつて来た要因はいろいろと考えられる。我々の指導力が欠けていると言われれば、

それまでだが、生徒も明らかに昔と違つてきている。一言で表現すると「案を選ぶ」傾向が強くなつてきたのである。昔ならば、行事と言えは燃える生徒がクラスに必ず数名いて、率先して取り組むので、周囲もそれにつられて動き出し、行事は盛り上がりつつ行くというのが普通だったのに、

現在では、できれば何もしたくないというのが大勢を占めているのである。

「真の楽しさ」は苦しいこと



平成元年 体育祭

とを乗り越えたところに有るのだということ。彼らは知らないような気がする。あるいは何をしてもよいのかを知らないのかもしれない。生徒会の仕事をしてみてそう感じる。

こういう状況の中で生徒会係の目標は、教師が率先して生徒の原動力となり、生徒に高校生活の楽しい「思い出」を一つでも多く作つてもらふことにある。苦勞して何かを成し上げた喜びや満足感に「思い出」としてではなく生徒一人一人の自信となり誇りとなつて行くからである。

生徒会活動の活性化が、学校全体の活性化につながり、ひいては同窓会活動の一つの力へとつながるように努めたい。

陸上競技部

監督 田島義弘

同窓生の皆様方には、陸上部に対して物心両面に御支援、御協力誠にありがとうございます。

伝説ある陸上部も昭和五十年代の低迷からようやく脱し

昨年の大会より



男子第40回全国高等学校駅伝競走大会

秒の県高校新記録を樹立しましたが十五位で入賞できませんでした。

本年は昨年以上の力を持つておりますので上位入賞の夢を果たせるのではないかと思っています。同窓生の皆様の御声援をよろしくお願いします。

最近の主な成績

昭和六十年	鳥取国体	百米	四位
		八百米	四位
		砲丸投	六位
昭和六一年	山口一H	八百米	五位
昭和六二年	沖縄国体	千五百米	四位
		百米	一位
		砲丸投	八位
昭和六三年	京都国体	五千米	四位
平成二年	仙台一H	四百米	八位
	全国高校駅伝		
昭和六一年		三二位	
〃 六三年		一六位	
平成元年		一五位	

事務局だより

平素より同窓会事業につきましては、大変ご協力頂きましてありがとうございます。

昨年度より、会員名簿の発行に当たり多くの情報・広告協賛を賜りまして正確な名簿を発行する事が出来ました。

大川美術館募金につきましても、昭和三十年以前卒業の同窓会員の方を対象にお願い致しましたが、百名の方々より百二十五万円のご協賛をいただきました。



同窓会寄贈のマイクロバス

かねてより支部組織をとのご要望がありまして、昭和六十三年十月に桐生市十八区の代表発起人会を開催させて頂きました。各地区の幹事さんのご協力によりまして現在次の支部が誕生しております。

在住地区でのご相談は次の支部長さんとお願ひ致します。

支部名	支部長名
第一支部	徳永 達郎
第二支部	小林 清
第三支部	周東 正治
第四・五支部	木村 広治
第六支部	鈴木 康弘
第九支部	村上 俊
第十支部	峯崎 一男
第十一支部	下山 殿司
第十二支部	高橋定二郎
第十三支部	斉藤武三郎
第十四支部	田中 周嗣
第十五支部	松井 賢一
第十六支部	田村 猛
第十七支部	亀山 憲明

(敬称略)

計報
次の方が今年度ご逝去されました。(敬称略)

二十四 M 後藤 專治
四十 F 小島 晋司



50周年記念事業の中庭

第二号会報は、二十五年ぶりに再開されました。今後は一年一回の発行を予定致しておりますので、支部活動・クラブ入会等ございましたら事務局までご連絡下さい。次の方々が編集委員会でご苦労されております。

委員長	周藤 晴二
(副会長)	
副委員長	北川藤一郎
(常任幹事)	
副委員長	星野 昭司
委員	丹羽 政文
	百海 晃弘
	中里 好博

(事務局長)
(敬称略)

編集後記

同窓生も開校以来一万五千人を数ぞえ、各方面で立派に活躍し伝統ある学校を築いて来ました。こゝに第二回目の同窓会誌を発行するはこびとなり、同窓会長学校長同窓会事務局の指導により編集委員を組織することになり、専門的な知識をもつ北川さんに委員として加わってもらい、又

つたこと、そして学徒動員、学校工場、そして終戦と同時に本来の学業にもどり運動、文化と全盛を迎え各種目の活躍、などなど、中でも終戦の日、「これからの日本」と云う作文を書いたと云うクラブもあつたとのこと、その作文集が保管されていればと思ひ乍ら編集を綴ることにしました。この第二版が同窓会諸氏の輪となり続版出来れば幸いです。

編集委員長 周藤晴二
卒業生数(含附中)
平成二年三月現在

振り返つてみると学校創立時、戦前、そして終戦、戦後の思い出が数限りない程浮かんで来ると思いますが、この思い出と共にそれぞれの原稿を寄せられ編集に協力頂きましたことに深くお礼を申し上げます。編集にたづさわつてみると年代により種々の思い出話が湧きなつかしく思われます。例えば創立時代の苦労、歴代立派な校長を迎えたこと、校庭の片隅にあつた奉安殿から燕尾服で三方にのせた教育勅語を頭上高く運ぶ様子、黒く光った帽子の先輩のこわか

○全日制	色染化学科	二、一七一名
	繊維工学科	二、四六〇名
	機械科	三、五〇九名
	電気科	二、五七三名
	土木科	七〇五名
	建築科	一、〇五二名
○定時制		
	機械科	一、一七三名
	繊維科	六四七名
	電気科	四四七名
	総数	一四、七三七名

○表紙の題字は、中里昌明氏